２０２１年7月１０日（土）

老球の細道６１９号

尊敬するコーチ新井春生先生との出会い④

会津バスケットボール協会　室　井　冨　仁

天は二物を与えずというが新井先生の場合はその原則に当てはまらない。剣豪宮本武蔵のように芸術の分野でも顕著な実績を残している。彫刻である。彫刻を始めた動機は、中学校の教員をしていた島根県安来市のバスケットボール大会の優勝盾を作ったことだった。その後、お世話になった人、感動した人等の肖像彫刻（レリーフ）を練習の合間に百像近く作ったという。数年前、私の肖像彫刻も作ると言われたが、畏れ多くて丁重に断った。

先生の数ある彫刻の中で最も有名なのは、１９５８年（昭和33年）東京で第３回アジア競技大会の芸術競技の部で見事入選した木彫である。その作品は１９５８年静岡国体で優勝した安来高校のメンバーが優勝に感激して涙するシーンが彫られている。当時の五輪もアジア大会もスポーツ競技だけではなく芸術部門の競技も並行して行われていた。

そしてこの木彫は、その後日本バスケットボール界をけん引する二人の偉大な指導者を引き合わせた。新井先生と高校男子バスケットボール界では神様的存在である元能代工業監督故加藤廣志氏の出会いである。英雄は英雄を知る。この有名な出会いは加藤廣志著『高さへの挑戦』〈秋田魁新報社〉や新井先生の著書『愛することがファイトになり知恵も出る〈限界への挑戦〉』〈近代文芸社〉にも記されている。

このアジア競技大会が開催された時、加藤氏は日本体育大学の学生で、バスケットボール部員は大会の補助役員で東京体育館に駆り出されていた。大会の合間に後輩と共に美術展会場を訪れた。そして、その会場で新井先生の木彫に出会い、その作品にくぎ付けになったという。一緒に美術展に同行した後輩が新井先生の教え子で島根県安来高校出身だった。

加藤氏は作品を見ながら、この後輩から新井先生の凄さ、すばらしさを聞きながら、優勝の瞬間を木彫にして残す指導者の愛情に心地よい感動を覚えると同時に、中学校教師でありながら、すでに中高一貫指導を取り入れていた新井先生の独創性に強い興味を抱いたと著書『高さへの挑戦』に記している。

【「せっかく中学時代に結束力を高めたチームを、進学という理由だけで各地の高校に分散させてしまうのはもったいない」というのが新井の持論らしかった。分散させないように、最初から中学生、高校生合同の練習をさせておけば、高校進学時に無用な心配など必要がないのだという】

また、新井先生の活躍している場が地方の島根県だということにも驚嘆している。

【新井が活躍している場が、当時全国上位レベルにあった浦和一女や栃木女子などがひしめく関東ではなく、島根ということに引かれた。安来は能代でいえば、近郊にある二ツ井という町ぐらいの規模なのであった。田舎でも全国制覇は可能なんだと私に初めて認識させてくれた意義も大きかった】

その後加藤氏は母校能代工業において前人未到の全国制覇３３回の記録を残した。〈続〉